

第七話 仏教と水

清水龍光

はじめに

私、「いいかげん」という言葉が大好きでございます。「いいかげん」とは本当は「良い加減」の意味。あまり難しくもなく、といてあまり簡単すぎないよう今日の話は、その辺をいいかげんにやってまいりたいと思います。

何しろ、人から頼まれると「ほいほい」と引き受けまして、それから何か考えて調べるのが癖でございます。それが生涯教育と言いますか、年を取ってからの勉強に一番良いのではないかと思ひ、そういう主義にしております。今回も栗田さんから頼まれて、すぐ「仏教と水」という言葉に飛び付いたのです。何故かと言いますと、私は寺の住職をしております。大学でも仏教を専門に勉強しておりました。それからまたま中学時代の恩師、矢島仁吉という先生が武蔵野の集落の研究をしておられました。地下帯水層の研究等に中学校時

代から引つ張り出されまして、いつも後を付いて回っております。また現在文京区で文化財の仕事をしておりますが、これがまた水と大きく関連してきます。このような次第でも知っている、仏教も知っている、この二つを結び付ければ良いのではないかと思つて簡単に引き受けたわけです。ところが案に相違して大変でした。最初、誰か他の人が書いた本があつて、それを適当に取捨選択して私の考えを入れて喋れば良いのじゃないかと思つて探しましたら、どこにもないのです。「神道と水」というのは幾らでもあるのですが、「仏教と水」はない。それから慌てまして、私の後輩で大学の先生をしている人に、「こういう話、なんとかならないか。」と尋ねたら、「それをやったら仏教学の博士になれる。」と言ふんです。この段階で普通ならお断りするところですが、そこは「いいかげん」な私。どこまで話せるかやってみようと思へたわけです。

五大

先ず、私の仏教の知識の中で水に関連したものがあろうかとおれこれ考えましたら、根本仏教の中に「五大」というものがある。この五大とは何かというと、世界を形成するもの、仏教というものは一番初めは哲学なんです。ですから世界を形成するものは何か、と言って出てくるものが、皆さんよくご存じの「地、水、火、風、空」です(図一)。これ



図一 五輪塔

が全てを形成するという考え方が仏教の一番根本にある。「地」というのは「固体」です。そして、仏教では「水」を液体の代表ととらえます。「火」は「エネルギー」、「風」は「気体」、「空」は「空間」ですね。今の私の説は、仏教学者に言わせますと、「君、そんなことを勝手に言ってるのよ。もう少し複雑なんだよ。」と言われるのですが、まあ良いでしょう。つまり、「固体」、「液体」、「エネルギー」、「気体」、「空

間」、これが世界を形成する。仏教というのはこんなものなんです。で、ここに先ず水が出てくるのですね。

生々流転

次に、これはまた全然別なんです。国立博物館に横山大観の描いた「生々流転」(しょうじょうるてん)という絵があるのをご存じだと思います。国宝の素晴らしい絵です。どんな絵かと言うと、一番最初に雲があつて雨がザーッと降っている、それからポトポトと滴になり、小川になり、谷川になり、それが山から次第に下って広い平野に出る。すると田があり灌漑をしている。水はやだて流れ下って港に出る。舟が入っている、漁師がすなどりをしている。そして海に入る。こういう絵なのです。私、この絵を見まして、なんとも言えない感動を覚えました。その感動は、例えば大観の「富士」を見て、その堂々とした姿に感動したというのではない。何か心の中にじわじわとしみこんで来るような、日本人の心の中に備わっている仏教的な「ものの見方、考え方」を掘り起こす感動だと思ふのです。仏教には「輪廻」という言葉があります。仏教の基本的な考え方の一つに「世の中は移り変わって行く。人々はたえず移り変わって行く」、それを水をもって表現した。素晴らしい絵ではないかと思ふます。

水掛け観音

一昨日、テレビを見ていましたら、巢鴨のお地藏様の所に
お婆さんが沢山いる場面が映りました。巢鴨というのは老人
の原宿と言うらしいですね。そこに水掛け観音があるのです。
お婆さん達が延々と長蛇の列を作ってその観音様に水を掛け
ていました。列の中のお婆さんに「どのくらい待っているん
ですか。」と尋ねますと、「一時間くらい待っている。何しろ
水を掛ければ嬉しい。だから四の付く日、四日、十四日、二
十四日に来まして、一時間並んで水を掛け、そして帰る。」と
いうのです。何のためにお婆さん達は水掛けに夢中になれる
のでしょうか。私は、以上の三つを「仏教と水」の底辺を流
れる形としてとりあげたいと思います。

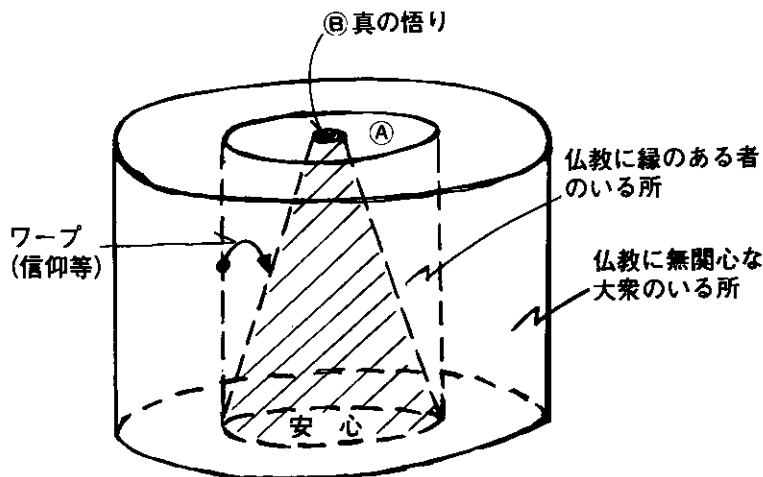
悟りと安心

さて、いよいよ本題の「仏教と水」に入りますが、これ
を明らかにするには、まず「仏教とは何か」ということを規
定しなければなりません。そこで先ずもって皆さんに簡単な
仏教の解説をしようと思います。それもなるべく簡単に世俗
的な意味で水に関連のあることだけを中心に解説して行こう
と思います。

仏教というのは、一つの言い方ですが、「悟り」、これに到

達するための一つの方法です。仏教の究極の目標は「悟り」
です。ところがこの「悟り」というのは簡単に出来ないの
です。例えば、「世の中は「地水火風空」で出来ている、分か
りましたか。」「分かりました。」「ところがこれは「悟り」では
ありません。これは「悟り」を説明するための一つ的手段に
しすぎない。

例えば三法印、これは皆さんよくご存じかもしれませんが、
「諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜」、この三つが三法印。中に
はもう一つ「一切皆苦」を入れてこれこそ仏教だという人も
います。「諸行無常」というのは「全てのは常がない。た
えず移り変わって行くものである。」「諸法無我」というのは
「全てのきまりは、永久に続くものではない、時々刻々変わ
るものである。」、そして「涅槃寂靜、靜かに落ち着いて、世
の中が平均的にちらばるような状態になれば、全ての悩みと
いうものはなくなる。」。主観的に考えますと、自分が死ねば
全ては終わりということですね。もし四つにするとしたら、
「一切皆苦、全てが苦しみである。」、そして、これらのことが
はつきり判ったときに「悟り」に達したのだと。こんな簡単
単なら皆さん、もう悟ったことになりませぬ。ところが全然
悟ってなんかいません。だからこの三（四）法印も「悟り」
に至る一つの手段と考えても良いし、仏教の構成理論と考え
ても良いでしょう。図一②の④において、ああ三法印が分かっ



図一2 悟り、安心、信仰の構造

た、五大が分かった、何々が分かった、分かった、と言っても図中の⑥の「悟り」に到達しない。では「悟り」とは、何か。お釈迦様、つまり釈尊は難行苦行をした。猛烈な難行苦行をして結局これが分からない。山から降りて、若い女の子は若い女の子というが大変良いと思うのですが、に牛乳を一杯いただいた。そして明けの明星ですか、キラッと光って悟ったと言うのですね。でもこの図中⑥の悟りは私達がいくら学んでも判らない。ただ修業をし学問をして限りなくこの悟りに近づくことができる。そして、その修業・学問をするそのことが仏教の目的、いや仏教そのものではないでしょうか。

ところで水掛け観音、水をジャーと掛け、たわしでこす。これ、こすってどうなるのですか。お婆さんが安心あんじんするのですね。この安心ということは一種の悟りなんです。あー良かったと思うわけです。だから私はテーマに「悟りと安心」と書いたのです。安心という言葉は仏教では「あんじん」と言いますが、「あんしん」と読んでもかまいません。そうすると、水掛け観音に水を掛けたお婆さんの悟りというのは、真の悟りではない。しかし、そのお婆さんにとっては同じなんです。世の中の人々全部が安心できること、それは一番大切なことではないでしょうか。そこで私は、悟りと安心とは図一二のように結ばれるのではないかと考えています。図一二

の斜線部分全体系が悟りなんだ、一番底辺が安心（あんじん）、そして安心を極めすべてが分かった所で真の悟りに至ると、このように考えていたのだと思います。

真の悟りに至るためにはどうするか、先ず私達、仏教と縁を持つ者は図一二の内側の円筒の周りにいるのです。三法印が分かった、何がわかったということ、円筒の壁から円錐の壁に向って進むことなんです。水掛け観音が一番底辺の方です。三法印は少し上かも知れない。ともかく円筒の壁から円錐の壁へ、両者の間隙を飛び越えなければいけない。しかも真の悟りに至るには、間隙はしだいに広がるのです。この飛び越えるのが、飛び越えさせるのが、仏教の教えなんです。一番底辺は水を掛ければいい。簡単です。それでも悟れますが、その悟りは低い悟りです。したがってすぐに心が迷ってきます。

お経と仏像

飛び越えるのにどのような越え方があるか。いろんな段階によって飛び越える距離が違います。釈迦様は、その段階を踏まえて導かれた。その結晶がお経なんです。お経というのは、簡単に言うと一般の人が悟りに達することが出来るようにお釈迦様が説いたお話なんです。

真の悟りに達する手段はお経の他にもう一つあります。象

徴を作って「おいで、おいで」とやるわけです。この象徴とお経とは一体になる。これが仏です。釈尊以外の仏です。阿弥陀仏があり、大日如来がある。「こういうのがあるぞ、これを目指して来い」と言えば、南無阿弥陀仏という人もあれば、南無妙法蓮華経という人もある、南無大日如来という人もいて、それぞれ目標を目指して、真の悟りに向かう。これがお経と仏像なんです。そういうものを一生懸命勉強して、それでもなかなか真の悟りに達しません。それを何とかその壁を打ち破るためにお経とか仏とかをはずしてしまつて接近する方法、それが修行です。一生懸命修行する、修行にもいろいろな方法がありますが、修行をすることです。真の悟りに近づく、そういう方法が一つあるわけです。

信仰

ところがもう一つ間隙をボンと飛び越える方法がある。それは信仰です。蠅の頭も信心からとか、信ずる者が勝つとか言います。信じれば間隙をふわっと飛んで、いわばワープして飛び越えられる。念仏を唱えれば極楽浄土に往生できるというような信仰がその代表でしょう。

座禅は修行の内に入るかもしれませんが、座禅をして心を静かにすれば悟りに近づく、これも信仰の一種ではないでしょうか。

さて、仏教の働きにはもう一つの部分があります。

仏教で悟りを得ようという人には以上の方法でよいのですが、仏教に全く関心の無い大衆が図で示すように更に外側にいるのです。図一二の外側の円筒です。内側の円筒は仏教を信仰しようという人達です。外側の人達に対してはどうするか。ともかく外側から内側の円筒までもつてくる、これも仏教のもう一つの働きです。「縁無き衆生は度し難し」という無縁の衆生に仏縁を付ける。これも仏教の重要な側面ではないでしょうか。非常にいいかげんな仏教の話でしたが、お分かり頂ければ幸いです。

水の形と性質

さて、仏教の次は水です。仏教ではワープさせる、つまり信仰に入らせるためによく水を用います。それでは水をどのように取り上げるのか。第一に形から見てみましょう。日本人として水を考えると、先ず海があります。次に川があります。それから湧水、泉があります。この三つが日本人の生活の中における水なのです。この三つの水から私達は何を導き出すのでしょうか。一つは動の世界です。川は、たえず移り変わって行きます。水流の変化、流転、海もそうです。たえず波が打ち寄せ動いている。二つに静の世界です。水は静止しますと、水面は鏡のようになります。つまり静寂な姿を表す。

三つ目は海がそうなのですが、遠い世界との間を離す、つまり障礙になる。例えば川も江戸時代以前の人々には障礙で、川を上流から下流まで歩くことは出来ないことでした。川下は他国なんです。行けない場所なんです。昔は川も障礙。以上が形から考えた水の特色です。

第二は、水の性質です。これは澄んで非常に美しい、奇麗である、清浄なものである。それから水は人間生活に欠くことの出来ないものである。例えば農業生産に、また飲み水として。その他生活用水として絶対必要です。つまり日本の水は形の上で先に述べた特色を持ち、性質の上で清浄であり、人間生活の上で不可欠の存在である。このように考えねばなりません。

インドの仏教

仏教が生まれたのはインドです。インドでは水をどう考えているか。釈迦が仏教を説き初めた頃のインドの川は、ものすごく幅が広く、ゆったりと流れている、それにあまり奇麗な川ではない。そういう川を見ながら、お釈迦様は仏教をつくったのですから、仏教の中には清浄であるとか、川は急流であるとか、そんな考えはない。だからインドの根本仏教には水というものはあまり入ってこない。例えば仏像は沢山ありますが、水に直接関係する仏像は、弁天だけです。従って

インド仏教の中では水はそれほど重要ではなかったというこ
とです。

それでは仏教が中国に渡ったらどうなるか。ここで別の話
をしなければなりません。

中国と大乘經典

お経というのは、お釈迦様が人々を救うためにお説教され
たことを書いてあると申しました。世間一般でもそう言われ
ていますし、仏教の解説の本にもそう書いてあります。実は
それは正しくありません。お釈迦様が亡くなった後、弟子達
が集まりました、お釈迦様がどのような話をお前にしたか、
私はこう聞いた、我かくの如く聞きき、「我聞如是」。お経の
本はどれもそのようにしてはじまっています。だからお経と
いうのはお釈迦様の説法だと言うのですけれども、お釈迦様
が亡くなった当時、インドのお釈迦様の弟子達は非常に優秀
で良く勉強している人達が多かったです。それでお釈迦様は難し
い事ばかり説いている。だから一般の人には分かりにくい。
一般の人達は、一生懸命勉強して少しでもお釈迦様に近付こ
う、そのためにはお経を読もう。そういった考え方でした。
そのうちこのような人々の間で、お釈迦様の説く悟りは、と
ても難かしい。もっと楽な悟りで良いのではないか、また悟
りに達するのにもっと楽な方法があるのではないか、そのよ

うな考えが生まれ、そこから簡単に悟りに到達する方法、即
ちワープが考え出されました。彼等は自分の考えを人々に説
き、それを勧めた。それが大乘経なのです。日本の各宗派が
使っているお経は、ほとんど全部大乘經典です。だからお釈
迦様の直接の教えではない。しかし、このようなお経もすべ
て「我聞如是」で始まっているのです。

大乘經典は、中国で作られた可能性が大きいのですが、こ
のうち大衆に親しまれている經典の一つが浄土三部経です。
この經典では阿弥陀仏の力で極楽浄土に生まれることができ
る。阿弥陀仏という名前を十回唱えるだけで、極楽浄土に、
ワープ出来るといのです。

八功德水

実は、この極楽浄土の中に水が出てくるのです。これを八
功德水と言い、その説明が詳しく書かれています。それによると
極楽の水には八つの功德がある。つまり甘い、冷たい、柔ら
かい、軽い、そして清浄である、臭いが無い、喉を痛めない、
腹をこわさない。これが極楽浄土の水である。でも現世の水
は、この場合は中国なのですが、この逆です。飲んだら腹を
こわす、臭いんです、そして喉が痛むのです。だから八功德
水を望んで極楽に生まれようという阿弥陀信仰が生まれるの
です。

ところが、このような八功德水が現実に存在する国がある。それが日本。今でも日本の山の水は八功德水です。だから日本は極楽。日本の水は極楽の水である、という考え方も当然生まれてくるのです。水はインドの仏教ではあまり重視されなかった、中国でもあまり重視されず、奇麗な水は貴重品であつた。ところが日本に來れば綺麗な水は当たり前。このことが日本仏教と水との関連を考える重要なポイントとなるのです。

奈良仏教と水

それでは日本仏教と水の関係を時代を追つて考えてみましょう。まず、奈良仏教です。この時代の仏教は三論、法相、俱舍、華嚴、鑑真的伝えた律宗など、いろいろありますが、理論的、学問的なのです。学問的だから人々の安心のために、は病氣になつたら薬をあげなさい、医者が必要である、農業をするためには橋が必要だ、このようなことが全てお坊さんに要求されてくる。ですからこの時代のお坊さんはいろいろな学問・技術に精通していた。それで水を入々の信仰に使うとともに、他の意味で大いに活用した。例えば、行基という僧がいます。最初はあまりにも優秀な技術を持っていたため僧侶社会から疎外されていましたが、最後には大仏を造る中心になつた人物です。彼は橋を六、溜め池を十五、堀を四、

用水路を七、船着き場を二造つた。これは現代の学者が行基が造つたとはつきり分かるものを調べ上げた結果です。つまりお経を読むとか説法するとかではなく、具体的なものをやつてゐるわけです。空海も同じです。讃岐平野の満濃池、日本最大の溜め池、あの規模にしたのは空海の改修によると言われます。このような水に関連する土木事業は何のためにしたか。当時の人々の生活の支え、農業を助けることによつて人々を信用させ、仏を信じなさいと言ふ。人々はその人の言ふことだからと言ふのでワーブする。これも奈良仏教の大きい布教の手段であつたのです。

山岳信仰と密経

次に、日本は紀元前後の頃水稻栽培が入つてきます。水稻栽培には絶対に水、つまり雨が必要です。そこで日本では農業神に対する信仰が古來から極めて強かつた。例えば奈良盆地、水を求めて水源を訪ねますと吉野川の最上流には水分(みくまり)神社があります。水源の神様で、それに対しての信仰が大変盛んだつた。ところが山の上ですから足の強い人でないと行けない。そこで先達が出てきて、例えば雨の降らないときには代わりに水分神を拜む。そのような信仰が強まつてやがて山そのものから水が出てくる、山が水を与えてくれるという山岳信仰が生まれる。この山の信仰を非常に強く打

ち出した人が「役の小角（えんのおずぬ）」という人です。彼が山岳信仰を体系化した頃、奈良から平安にかけての頃ですが、日本に新しい仏教が入ってきた。それが密教です。

密教とは、人に知らせない教えということで、非常に難しく、深遠で、神秘で、普通の人にはとても理解出来ない。

つまり高野山、比叡山の真言宗、天台宗のお寺は、一般の民衆は近寄り難い存在だったのです。

そこで真言の人達は、一般の民衆をどのようにして救おうかと考えた。そのためには因一二の底辺の方まで下げて来ないといけない。そして短い間隙をワープする方法として呪文、呪法というものを使う。例えば平清盛が熱病に罹ったとき坊さんが側で祈禱を上げる。当時の人達はそれでワープ出来たのです。その密教の呪法と役の小角の水が結び付き出来たのが修験道です。この修験道の中心は吉野です。吉野の奥には大峰、さらに熊野とこの山岳一帯に栄えました。その後天台と真言が勢力争いをして、天台がおさえた熊野が中心になっていきます。修験道は呪法をしますから、そのために聖なる水がどうしても必要だということになる。一番普遍的な水の使い方は、「灌頂」という儀式です。浄土教でもやるのです。水は聖なるもの、仏の考えを相手に伝えるものという位置付けで、例えば仏像開眼の時などお香をたらしした水を仏像の頭にちよっと付けると魂が移ったということになる。灌頂

は、天台、真言の仏法を伝える最高の方法として出来ました。灌頂にもいろいろあって、初めは秘密の教えを伝え終わった証しにやったが、しまいは師匠と弟子の関係を結ぶため、ついに檀家にまで灌頂をするようになった。ともかくそういうことに彼等は水を使った。

ところがともかく面倒である。もつと簡単な方法はないかと考えてみた。あそこに那智の滝というのがあります。一人のお坊さんがワープのためには呪文も必要だが、修行もしなければならぬと、那智の滝の中で裸になって祈りを始めた。

これが裸形上人。これは滝に打たれて修行した最初の僧ということになっていく。このようになって以前からあった雨の信仰（雨は水が蒸発して空に上がり、再び降りてきます、これを中国では竜に例えた）の対象に那智の滝がなるわけです。

そしてついに熊野は浄土である、仏の世界であるということになってきます。このころ本地垂迹（ほんじすいじやく）という説が生まれてきました。つまり仏が本地で、それが形を変えて現れたものが神である。例えば大日如来が本地で、それが形を変えて現れたのが天照大御神である。そういう考え方です。これ以後熊野の社がほとんどすべて仏と結び付きました。熊野の本宮大社の神は阿弥陀如来が形を変えたものだというように熊野にあった神社が全てお寺と結び付くんです。そして一番中心が阿弥陀仏になるのです。あそこは水が

綺麗だ、八功德水が湧いている、極楽浄土だ、という考え方が生まれ熊野浄土と言われるようになりました。

浄土教と水

さて、次に末法思想ですが、平安時代の終わりになると武士が台頭してきます。非常に陰惨な時代に入る。ところがお釈迦様の説法の中には「私が死んだ後、千年すれば正法の時代、即ち自分の教えが正しく行き渡った時代になり、その次の千年は像法の時代で教えが形だけ残る。二千年を過ぎると末法の時代で、教えも形も全て崩壊する時代になる。」ということを説いた。そしてそれを再び救いに現れるのが弥勒菩薩です。五十六億七千万年後に現れると説かれている。仏教というのは話が大きいんです。ともかくお釈迦様が亡くなって二千年経つと世の中乱れに乱れてくる。ところが一千五十二年、持承七年、これが丁度二千年目なんです。これはお釈迦様の死んだ年がはつきりしないからあやふやですよ。中国に壬申つまり六十年に一度世の中が大きく変わるといふ説がある。お釈迦様が死んだのは必ず壬申のはずだった。それから考えると紀元前九四九年だ。この基準で二千年目になるんです。この年に長谷寺が焼けます。平家の横暴極まる世になってきます。そして源氏との戦いが起きます。当時の人々に末法の世が実感され、皆、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱え、

「遠離穢土欣求浄土」という考え方が強まってくる。そして浄土宗とか浄土真宗とか持宗が生まれて来るのです。

さて、先に言いましたように寺には水が必要だ。真言、天台では仏にあげる水である、または灌頂のための水である。聖なる水である、という形をとりましたが、ここに来て、それよりも水は極楽浄土の水を表すような静かな水が良いのではないかという考えが強まります。そこで浄土教の寺では浄土庭園という石の組み方の違う庭園が生まれて来ます。三尊形式と言ひまして、阿弥陀、勢至、観音という三つの石を中心にして、極楽浄土を表現するこんな庭園です。文京区に土蔵造りのお寺があります。講安寺という寺で、江戸時代中期に出来ました。土蔵だから火災に全然焼けない。この本堂には浄土の池を表す板敷きがある、阿弥陀様の真前で漆塗りにしてあり、びかびか光って、極楽の池を表している。これが浄土庭園の原型です。それが外に出ると三尊形式と言われる浄土庭園となるのです。

浄土教の坊さんは、一般の人達を極楽に導くために紙芝居を作っています。これを観経曼陀羅と言います。真ん中に極楽の絵、その周辺にカピラ城での事件の物語。さらに極楽の見方が十六通り画いてある。その第二番目が水想観。水と水の美しく輝いているのを頭に思い浮かべながら、極楽を眺める。このように説明するようになってくる。さらに第五番目

の宝池観。ここで八功德水が出てくる。水を極楽の非常に有用な要素として画いてある。

この観経曼陀羅の最初は、当麻寺の本尊の当麻曼陀羅です。浄土信仰がまだ出て来ない前の古い時代のもですが、平安の終わりに浄土教が盛んになってくると、これを真似たようなものが沢山出て来ました。そして一般の人達に極楽往生を教える。その中の重要な要素としてこの水想観、八功德水を教えたのです。

禅宗と水

鎌倉時代になると禅宗が入って来ます。禅宗という教えはただ座れば良い。座って、先ず心を静かにして練る、乱れた思いに妨げられないようにする、ものを正しく見極める、これが座禅です。浄土宗は、正面に阿弥陀如来を祀ります。真言、天台は大日如来を祀る、華嚴は毘盧遮那仏を祀る。ところが禅宗は本尊をあまり特定しない。それでは何が中心かというところ、強いて云えば自分の師匠なのです。ですから師匠が亡くなると、師匠が書いた書、または師匠の姿を等身大に作りまして、それを祀るのです。祖師像で国宝になっているものが禅宗に多いのはそのためです。そして毎日お茶をあげました。お茶を日本に最初にもたらしたのは栄西だといわれています。栄西は禅宗の僧。彼が梅尾の高山寺に植えたのが最

初で、それから次第に広がって宇治に伝わるのです。つまり禅宗の坊さんがお茶の木を植え、薬として広めたのです。さて禅宗ではお茶を祖師にあげるのには前にお話したように仏にあげるのと同じでした。なるべく綺麗な水を使い、それがしだいに作法化して「茶の湯」に発展します。

茶の作法には流れがあり、起伏があります。これを「うしろう」といって、茶人たち、ここでは禅宗の僧達と云ってもよいでしょう、は大切にするので、うつろい行くというのは元来三法印の内容であり、これをお茶の中に生かした。だから禅僧にとってお茶は、リクリエーションではなく、禅そのもの、だから「茶禅一如」と言う言葉が生まれるのです。お茶は、水を選びます。従って水と切っても切れない縁を持つてくる。また心を静かにするために庭が必要になる。茶庭の登場です。庭には水が必要。せせらぎでなく、静止している水。その静かな庭園を見ながら彼等はお茶をたしなむ。さらにこれが極限まで行きつくと枯れ山水になります。枯山水とは水がいらないというのではなく、水の大切さを象徴したもののなのです。また、室町時代、禅宗の僧侶達は、「わび・さび」の美意識を大切にしました。「わび、さび」という言葉の意味は「湿り気」です。湿っていて、庭に苔が生えている、木の肌がしっとりしている、つまり禅宗の考え方は水から離れては成立しない、そう考えてよいでしょう。

日本の仏教と水

時代が進むにつれ、生活に追われる一般民衆は、出来るだけ簡単な安心（心の救い）を求めようになる。浄土諸宗も禅宗もこの要求に答えて活動してきたが、さらにもっと直接的に仏の有り難さが分るような方法がないだろうかと考えるようになった。そして、せっかく清冽な水のある日本にいるのだから、この水を利用しない手はない、そう考えて時代が下るにつれて徹底的に水を利用するようになりました。信仰も図一二の底辺の方にどんどん下がってきます。

例えば水は聖なるものであり、仏との媒体であるという説明から生まれるのが末期の水、また赤ん坊の産湯、これもお寺の井戸を使う。正月の若水も寺に汲みに行くことも多かつた。

聖なる井戸から聖なる水を汲み、産湯や若水や末期の水に使うことによって、仏との結び付きが強められる。こんな形で水を用いるようになった。

南無阿弥陀仏と言えば浄土に往來できるというのが、浄土教の教えなのですが、それで物足りない人のためにいろんな信仰が生まれてきます。例えば、浄土は西方十万億土の彼方にあると言われているのですが、日本人は遠い所、隔絶された所を海、または大きい川で表す習慣あり、これが海の向こ

うに浄土がある、川下に浄土があるという考え方を生みだします。川や海に精霊船を流す、笹船にお雛様を乗せる、人型を流す、これらはすべてこの考え方から出てくるのです。

江戸時代になると観音信仰が盛んになる。観音の本当の名は世音、世の人々の苦しみを聞き、それに応じて対処してくれる、という意味です。だから願う人々に応じて千変万華に変化していく。観音三十三身、三十三変化。観音はこの考えから生まれてきたのです。さらに観音信仰が強まると、観音の浄土を想定するようになる。補陀落（ポータラカ）浄土がそれです。そして、ついには「補陀落浄土」に行くための船出が熊野で盛んになります。これが補陀落渡海ですね。

また、観音様は、どんな願いでも聞いてくださるといふので、観音浄土に生まれたいという願いで水をジャーとかければこの水を付けければ治るといったような民間信仰が数えきれぬほどあるのです。これは水が聖水である、清浄である、同時にかけることで仏と一体になるという考え方から生まれて来たのです。

日本人の美意識

最後に横山大観の「生々流転」です。皆さんはあの絵を御覧になれば、きつとなんとも言えない懐かしさと引かれるも

へ行きますから。この地獄の表現は、当時の僧侶や絵師が想像できる最も嫌なものを画いた、そう考えて下さい。

稲場 お寺は水洗便所が多いと言われました。嫌なものが出るわけです。するとお寺の糞便は地獄へ行くわけですな。

清水 川に流すと清浄になる。だから地獄に行きません。それでは地獄の糞便はどこから来たのかということになるが、それは理屈。そんな理屈でなく、ただ、嫌だ、汚いということでしょうね。

稲場 曼陀羅で上に極楽、下に地獄が描かれているというようなのはありませんか。餓鬼道に落ちた人達の世界を描いたような。

清水 地獄変相図という図があります。それは地獄・餓鬼・畜生・人・天を順次表した絵です。

稲場 お寺とは何でしょうか。

清水 仏教を支える人間が僧侶集団を作ります。その集団が生活する場が寺なんです。野宿しておれば元来寺はいらないのです。法然や親鸞は「私の言っていることが仏の教えなので、寺を造ったりしてはいけない」と言っています。本来は寺がなくとも仏教はある。

中西 仏教で水を使う時の戒めのようなものはあるのでしょうか。

清水 無駄に使うなということとはよく言います。特に禅宗

では。禅宗では便所に入る作法もあります。水に感謝して、中に入って、座って用を足すわけです。水は大切にしなければならぬということは、禅宗等では特にやかましく言います。何故かというとなら禅宗は中国で生まれた。中国は水が少ない。禅宗は恐らく中国の伝統を守っているのではないのでしょうか。

中西 捨てる場合はどうでしょうか。

清水 仏教では特にならないように思います。でも水は結局巡り巡って自分に戻って来るから、汚してはいけないうこととはよく言いますね。日本では水が豊富だから、汚してはいけないうもの、どんどん捨てろというのが、日本の仏教集団の考えではないか。中国ではそうではなかったやうですね。

中西 お寺の水洗便所の構造は。

清水 川の上の便所があると考えればよい。流れているんです。

北川 根本仏教の彼岸の世界、死後の世界の中での絵姿とというのは、それがあるとすれば極楽の世界の絵姿と全く違つたものなのか。それとも根本仏教にはそのようなものが無かつたのか、そのあたりを。

清水 極楽浄土を表現したお経は、無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経の三巻が中心になる。この三巻の中に極楽浄土が出てきますが、これは根本仏教ではないと言われています。

日本の仏教と水

時代が進むにつれ、生活に追われる一般民衆は、出来るだけ簡単な安心（心の救い）を求めようになる。浄土諸宗も禪宗もこの要求に答えて活動してきたが、さらにもっと直接的に仏の有り難さが分るような方法がないだろうかと考えるようになった。そして、せっかく清冽な水のある日本にいるのだから、この水を利用しない手はない、そう考えて時代が下るにつれて徹底的に水を利用するようになりました。信仰も図一二の底辺の方にどんどん下がってきます。

例えば水は聖なるものであり、仏との媒体であるという説明から生まれるのが末期の水、また赤ん坊の産湯、これもお寺の井戸を使う。正月の若水も寺に汲みに行くことも多かつた。

聖なる井戸から聖なる水を汲み、産湯や若水や末期の水に使うことによって、仏との結び付きが強められる。こんな形で水を用いるようになった。

南無阿弥陀仏と言えば浄土に往来できるというのが、浄土教の教えなのですが、それで物足りない人のためにいろんな信仰が生まれてきます。例えば、浄土は西方十万億土の彼方にあると言われているのですが、日本人は遠い所、隔絶された所を海、または大きい川で表す習慣あり、これが海の向こ

うに浄土がある、川下に浄土があるという考え方を生みだします。川や海に精霊船を流す、笹船にお雛様を乗せる、人型を流す、これらはすべてこの考え方から出てくるのです。

江戸時代になると観音信仰が盛んになる。観音の本当の名は世音、世の人々の苦しみを聞き、それに応じて対処してくれる、という意味です。だから願う人々に応じて千変万華に変化していく。観音三十三身、三十三変化。観音はこの考えから生まれてきたのです。さらに観音信仰が強まると、観音の浄土を想定するようになる。補陀落（ポータラカ）浄土がそれです。そして、ついには「補陀落浄土」に行くための船出が熊野で盛んになります。これが補陀落渡海ですね。

また、観音様は、どんな願いでも聞いてくださるというので、観音浄土に生まれたいという願いで水をジャーンとかけ欣求浄土の橋渡しに水が使われるのですね。さらに目が悪ければこの水を付ければ治るといったような民間信仰が数えきれぬほどあるのです。これは水が聖水である、清浄である、同時にかけることで仏と一体になるという考え方から生まれて来たのです。

日本人の美意識

最後に横山大観の「生々流転」です。皆さんはあの絵を御覧になれば、きっとなんとも言えない懐かしさと引かれるも

のを感じることもだろうと思います。それはどうしてでしょう。生々流転、輪廻転生。絶えず移り変わりながら元に戻って来るといふ考え方、これが川の流れと結び付いて、私達の心の中に日本人独特の美意識として残っているのです。徒然草の「ゆくかわの流れは……」に感動し、桜の花は散るからこそ美しくいと主張する日本人、それは仏教の輪廻の思想と美しい水に恵まれた日本人でこそ云える言葉ではないでしょうか。

討論

多田 カルマとかダルマという言葉の意味はなんでしょか。

清水 ダルマというのは法です。カルマは業とでも言いましょうか、人の生前の行いが死後を決めるということですよ。達磨大師は、法そのものという意味でダルマと称したようですよ。

渡辺 高野山では便所が川に流すようになっています。でも一番の高僧の糞尿は流さなかったという説もあります。戦後まである由緒ある方が汲みとっていた。自分は空海の頃は野糞だったと思うのですが、水は聖なるものという観念はあったが、お坊さんは汚していた。捨てる所がないわけですから。

清水 真言、天台が入って来る以前の奈良仏教は、平地にありました。坊さんが貴族等と接触して墮落すると言うので山に入った。そこで先ず重要視したのは水なんです。高野山では玉川に流している。大変急流なんです。京都の南、田辺の一休寺、新休寺とも言うのですが、あそこに国宝の便所があります。水洗便所です。あそこはあまり急流ではありませんが、川に流すんです。汚いものを川にながして、それが清浄になるというのが日本人の川に対する考え方だったと思います。一つのお清めなんですよ。山の上の寺は昔から、下水道完備だったと言えますね。

栗田 先生は、インドの根本仏教では水が出てこない、それは水が汚れていたからだとおっしゃいました。何故なんでしょうか。

清水 先ず考えられるのはインドの河は大きい、大河である。だから流れが緩やかである。従ってどうしても汚れる。それとヒンズー教では水葬が多いんです。動物の死骸なども流す。今でもガンジスの上流で牛の死骸が流れているのを見たという話を聞きます。だから清浄という感じはない。もつともヒマラヤの山麓はそうではないでしょうが。釈迦の生まれた国は、農村地帯であつたからそうなんだと私は思います。

余談ですが、仏像でも水に関連した如来がない、それに普

薩がない。如来と菩薩がないと、仏の主だったものは全部無いことになりす。強いて言えば謝水観音、でもこれも江戸時代です。

谷口 室町以前のお風呂は殆ど蒸し風呂でしたが、宮中やお寺では今のようなお風呂があった。東大寺には随分昔から浴室があったようです。室町時代から施徳するといふ趣旨から湯に入る今のようなお風呂を庶民に解放した。もともとお寺で湯か、あるいは水か、どちらか分かりませんが、を浴びたというのは宗教儀式だったのでしょか。

清水 法華寺に風呂の跡があります。光明皇后がライ病の患者を保護した。そのように病人の治療のための蒸し風呂はありました。それ以外は全部水浴です。お寺には風呂がありました。水を聖なるものとし、それを浴びることによつて「けがれ」を払うということは相当古い時代からあった。その場所が風呂だとすれば、そうした場所があったといふことでしょうね。

稲場 生々流転という言葉、あるいは輪廻転生といった言葉で現される円環状に回つて元に戻るといふ思想と極楽と地獄といふ直線的な思想、つまり回つて戻る思想と絶対に戻らない思想、両者は噛み合わないような気がするんです。矛盾のような気がするんですが、これはどのように考えれば良い

のでしょか。

清水 輪廻転生という考え方は根本仏教の考え方なんです。根本仏教ではうつろい行く世の中というものを強く打ち出している。これは安心して良いことをして一生懸命働いて生活させる。それが目標なんです。ですから、後世になるとその人の生前の形によつて地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天といふ六つの世界があつてその間をぐるぐる回らせられるとか、極楽に行くのにこの世界にいると何万年もかかとか、いろいろなことを例え話にして説明するわけです。ですが、絶えず移り変わつて再び人間に戻つてくるという考え方をした方が人々の気持ちに安心感を与えるといふので、輪廻転生といふことを言うわけです。しかし、時代が進むにつれて一般民衆の苦しい生活の中から、もっと簡単に安心が得られるように大乘仏教が生まれた。その中に地獄・極楽の考え方が強調されます。極楽へ行つた後、どうなるのだといふことは何も書いてありません。当時の苦しんでいる民衆は、今日食べるものも困つた。だから極楽に憧れる気持ちが強かつた。それに合わせたのが大乘仏教であり、浄土教だと思つて下さい。

稲場 地獄の中には下水道地獄とか糞便地獄だとか、そのようなものはあるのでしょうか。

清水 下水道地獄はないが、糞便地獄はあります。地獄の表現は観音経に拠つて居るのです。浄土教には無い。全部浄土

へ行きますから。この地獄の表現は、当時の僧侶や絵師が想像できる最も嫌なものを画いた、そう考えて下さい。

稲場 お寺は水洗便所が多いと言われました。嫌なものが出るわけです。するとお寺の糞便は地獄へ行くわけですね。

清水 川に流すと清浄になる。だから地獄に行きません。それでは地獄の糞便はどこから来たのかということになるが、それは理屈。そんな理屈でなく、ただ、嫌だ、汚いということでしょうね。

稲場 曼陀羅で上に極楽、下に地獄が描かれているというようなのはありますか。餓鬼道に落ちた人達の世界を描いたような。

清水 地獄変相図という図があります。それは地獄・餓鬼・畜生・人・天を順次表した絵です。

稲場 お寺とは何でしょうか。

清水 仏教を支える人間が僧侶集団を作ります。その集団が生活する場が寺なんです。野宿しておれば元来寺はいらないのです。法然や親鸞は「私の言っていることが仏の教えなので、寺を造ったりしてはいけない」と言っています。本来は寺がなくとも仏教はある。

中西 仏教で水を使う時の戒めのようなものはあるのでしょうか。

清水 無駄に使うなということをよく言います。特に禪宗

では。禪宗では便所に入る作法もあります。水に感謝して、中に入って、座って用を足すわけです。水は大切にしなければならぬということは、禪宗等では特にやかましく言います。何故かというとならば中国で生まれた。中国は水が少ない。禪宗は恐らく中国の伝統を守っているのではないのでしょうか。

中西 捨てる場合はどうでしょうか。

清水 仏教では特にないように思います。でも水は結局巡り巡って自分に戻って来るから、汚してはいけないうこととはよく言いますね。日本では水が豊富だから、汚してはいけないうもの、どんどん捨てろというのが、日本の仏教団の考え方ではないか。中国ではそうではなかったようですね。

中西 お寺の水洗便所の構造は。

清水 川の上に便所があると考えればよい。流れているんです。

北川 根本仏教の彼岸の世界、死後の世界の中での絵姿とこののは、それがあるとすれば極楽の世界の絵姿と全く違つたものなのか。それとも根本仏教にはそのようなものが無かつたのか、そのあたりを。

清水 極楽浄土を表現したお経は、無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経の三巻が中心になる。この三巻の中に極楽浄土が出てきますが、これは根本仏教ではないと言われています。

北川 それでは根本仏教には彼岸という考え方は無いんですか。

清水 彼岸というよりも生々流転ですね。根本仏教は図一、二の頂点の悟りだけ。それ以外の信仰とか行とかは一般民衆を救うための手段、方便なんです。お釈迦様は人々を救済することを目的とされたから、そのための手段として極楽も考え出されたと思います。例えば観音浄土・ポータラカというのは、法華経普門本に載っている考え方なんです。一箇所なんです。本当はそんなものは無視しても良いのですが、人々を救うためにはそれが良いというので、説かれているのです。

福田 旅と信仰という点で伊勢参り、大山参り。例えば伊勢参りでは大変な時間とお金をかけ、伊勢神宮だけでなく様々な宗派を回っている。伊勢参りの意味がよく分からなくなるのですが、そのあたりを。

清水 沢山寺を回るといふのは、現世信仰で目の前の欲望を満たすためだと思います。江戸時代元禄以降は特に顕著です。だから何宗でもいいんです。仏教の墮落でしょう。現世利益信仰です。時代が下るにつれて顕著になりますね。

須藤 河口慧海の『チベット旅行記』の中に「ラマ僧の大便、小便は決して捨てない。大小便ともに薬にする」といふようなことが書いてあります。他にも薬に使うと書かれた本

が何点かあります。これには現代科学でそれなりの根拠が与えられていると思いますが、宗教の立場からはどのように説明されますか。

清水 宗教とか信仰とかは、鰯の頭も信心からと申します。ガンも信仰の力で直るといふ人もいます。これはもう仏教ではありませんが、病氣というのは多分に精神的な面が強い。本当に効くと信じている人が飲めばおそらくそれが何であつても効くのではないか。例え排泄物であつても、と私は思います。科学に毒されている人達は小便の成分を考えるから効かない。それから河口慧海のラマ教、あそこは乾燥地帯です。大便でも直ぐに乾燥してしまいます。だからこれは飲むのにそれほどいやじゃない。そういった感じが出てくるのではないかと。日本で祖師の便を喜んで飲んだという事実は記憶にありません。日本は湿気が多いので、腐ってしまうのではないでしょう。

中学校時代、戦争中でしたが、園芸部に入っていました。肥の熟成度を調べるためにお百姓さんは便をなめるんです。私達もなめさせられました。新鮮なのは酸っぱい、熟成したのはあまい。便に対する抵抗がなければ、信頼する人の便なら薬として飲むこともあり、飲んだ場合に効くこともあるかもしれない。

須藤 三浦命助という南部藩の百姓一揆の指導者が『獄中

記」という本を書いています、その中にそのような話があり出てきます。ただ薬草と一緒に使っていて、便単独ではないようです。

藤森 永平寺には便所のことを東司（とうす）と書いてありました。このように言う理由と他の宗派では別の言い方をしているのか、そのあたりを教えてください。

清水 禅宗寺院では、便所は七堂伽藍の一つ山門を入れて右側、浴室に対比してつくられました。禅宗寺院の基本形が南北線につくられたので東側が多かった。それで東司と言われたのではないのでしょうか。

渡辺 日光の東照宮は便所に西を使っているようです。西浄（せいじん）（西司）と言うようです。今広辞苑を引いてみました。禅宗の便所で、東司は東序に属する者が使用（都寺）、西浄は西序に属する者が使用（首座、監寺等）とあります。

西村 ある登山家がチベットの方に行った話ですが、その登山家はポーターやシェルパと一緒に一生懸命歩いた。ところが一週間位経った頃から彼等が全く動かなくなりました。何故かと悩んだらしいのですが、ようやく分かったことは、自分達の魂はまだ向こうにいるということだった。私はその紀行文にショックを受けた記憶があります。

さきほどの話では大乘仏教は日本に適したように変えたも

のでした。仏教は墮落したという話もありました。しかし体と魂が一体となって安心が得られるということであれば、仏教の立場から現代の世相に対する提言があっても良いように思います。いかがでしょうか。

清水 仏教が一番墮落したのは江戸時代なんです。何故かと言うと宗門人別帳で人々を全てお寺の檀家に組み入れたんです。お寺は安心して生活出来るわけです。それで寺は豊かになり、僧侶は墮落した。お坊さんが一番困ったのは明治の廃仏涅槃なんです。明治以降檀家がどんどん離れて行きます。それで仏教興隆の運動が起きてきたのです。しかし、人がいなかったのか、それとも科学が発達したために合理的な思考法が定着してきたためか、顕著にならない。運動は何度も起こるんです。友松円諦という人は大正の終わり頃から昭和の初めにかけて神田寺というのを造った。これは聖徳太子を中心にした活動なんです。でも今はその教えは消えて、元の浄土宗になっています。ともかく人がいなかったのか、現代の考え方が仏教に向かなくなってきたのか、どちらかでしょう。私は仏教という言葉が無くなっても良いと思います。人々が豊に安心して生活出来ればそれで良いんだ。昔は僧侶はあらゆることを知っていた。ところが今はそんな人は一杯います。例えば学校の先生は僧である。僧がいてそれを聞く者がおれば、そこに仏の教えは通じている。そう考えれば良いのでは

ないかと思ひます。仏教が今の人達に必要なが無くなれば、仏教は無くなつても良い。私はそのように思ひます。

仏教は歴史的に見ると、時代とともに変わつてきました。

現代の仏教は時代を支えられぬのか。そこが問題だと思ひます。しかし、日本人の美意識には抜き難い仏教的なものの方が入り込んでゐるのです。これは変わらない。減びて行くものに美を感じるんですね。これが日本人なんです。

毛利 仏教における仏像の位置付けについて教えて下さい。釈迦の位置付けですね。

清水 釈迦が一番中心です。釈迦が亡くなった後、釈迦に對する親しみ、尊敬が仏教の中心になるのです。釈迦没後百年位は仏像はありません。あつたのは釈迦の骨を埋めたストゥーバだけ。あとは釈迦の足跡等を礼拝した。ところが百年から二百年位の間に仏像が誕生しました。その頃アレクサンダー大王が東征して来ます。彼等はギリシャ彫刻の手法を持つてゐるわけです。それで釈迦の彫刻が誕生しました。ガンダーラ彫刻は全部仏像がギリシャ彫刻のようです。最初は釈迦像です。それから釈迦を守る像が出来る。それが菩薩、それから経文に出てくる仏が造られます。如来ですね。こうして次第に色々な仏像が生まれたのです。

仏像には一番上に如来がある。次に菩薩、それから明王、天。ところが明王や天はヒンズー教の影響が強い。だから本

当の仏像は如来・菩薩と考へてよいのではないのでしょうか。明王や天は、個性が強い。従つて民間信仰に都合が良いのです。

毛利 インドの思想は自然との調和を重視したものだと思ふのです。根本仏教には水のことが無いといわれましたが、インドの思想が仏教に影響を及ぼさなかつたとは思へません。

清水 釈迦が一番悩んだのは、釈迦はアーリア民族、つまり支配階級なんです。インドにはカースト制度がある。それを否定するためにつくられたのが仏教なんです。それを釈迦は悩んだ。ともかく身分制の否定ですね。そこから仏教が生まれた。私はそのように考へています。